氏　名（本籍）	青山恵子（あおやまけいこ）（東京都）
学位の種類	学術博士
学位記番号	博音第４号
学位授与年月日	昭和62年２月12日
学位授与の要件	学位規則第５条第１項該当 音楽研究科音楽専攻声楽研究領域
学位論文等題目	（論文）「日本歌曲に於ける歌唱法の実践的研究」 — 伝統音楽との接点・その考察と実践論 — （演奏）◦AIYAN の歌（全五曲）　北原白秋詩，山田耕筰曲 ◦佐藤春夫の詩による四つの無伴奏歌曲より， うぐいす　佐藤春夫詩，早坂文雄曲 ◦お六娘　林　柳波詩，橋本国彦曲 ◦城ケ島の雨　北原白秋詩，橋本国彦曲 ◦けむり　藪田義雄詩，小山清茂曲 ◦おきく　島崎藤村詩，小山清茂曲 ◦平井澄子小品集より 牡丹　北原白秋詩，平井澄子曲 拾った葱　野口雨情詩，平井澄子曲 他ト我　北原白秋詩，平井澄子曲 あいびき　北原白秋詩，平井澄子曲 六騎　北原白秋詩，平井澄子曲 ◦中世風の三つの歌 1.あわれ，2.はやしことば，3.シテテン 増本伎共子曲
論文等審査委員	論　文

（主査）	東京芸術大学	教　授（音楽学部）	法学士	服部　幸三
（副査）	〃	〃（　〃　）		松村　禎三
（　〃　）	〃	助教授（　〃　）	文学士	上参郷祐康
（　〃　）	国立歴史民俗博物館	教　授	芸術学士	小島　美子
（　〃　）	東京芸術大学	助教授（音楽学部）	学術博士	柘植　元一
（　〃　）	〃	教　授（　〃　）		佐野　萌

（副査）	東京芸術大学 教 授（音楽学部）		伊藤　亘行
（〃）	〃	〃（〃）	須賀　靖和
演　奏			
（主査）	東京芸術大学 教 授（音楽学部）		須賀　靖和
（副査）	〃	〃（〃）	伊藤　亘行
（〃）	〃	〃（〃）	佐野　　崩
（〃）	〃	非常勤講師（〃）	畑中　良輔

論 文 内 容 の 要 旨

博士課程に於て，日本の歌曲[*1]の歌唱法，特に伝統音楽との接点をテーマに実践研究してきた。この論文はその成果に対して，科学的検証を加え，又今後の方向を探ることを目的として書いたものである。ここでは私のこれまでの研究の中から二つのテーマを選び，いくつかの実験を行った。

1. 民謡的歌曲[*2]に於ける発声法の実験研究
2. 音の移行法についての音響的分析

第一のテーマは発声法の研究として，特に音色に最も関連を持つ共鳴作用に焦点を当てた。研究方法として，民謡的な性格の強い歌曲（以下，民謡的歌曲とする）の歌唱に於ける音声（私自身が身につけている洋楽的な発声法にこれまで学んだ民謡の発声法を反映させたもの）と，民謡的な性格の希薄な歌曲（以下，日本歌曲とする）の歌唱に於ける音声（洋学的な発声の要素が強いと思われるもの）とを，いくつかの実験で比較していく。又同時にイタリー歌曲も実験に加え，日本歌曲に於ける音声の洋楽的要素について検証を試みた。尚，比較分析の対象としたのは，上記の三種類の歌曲それぞれの歌唱に於ける音声から選び出した5母音である。

(1) 民謡的歌曲の歌声は，日本歌曲に見られるヴィブラートを伴わず，又高次倍音域により多くの成分を含む。その音声は，日本歌曲より，話し声の日本語の音韻により近いフォルマントを持っている。又日本歌曲と同様に明瞭な Singing Formant を持っている。

(2) 民謡的歌曲の歌声は，日本歌曲より開口度が少なく，舌も高めである。又喉頭もやや高めに位置し，全体的に共鳴腔が狭くなっている。

＊1. 明治に西洋音楽が輸入されて以後，特に西洋の音楽技法を用いて作曲した日本語の種々の歌曲全般をさす。

＊2. 日本の歌曲の中でも，民謡的な性格の強いもの（詳しくは，本論文49頁で説明）。

(3) 一方，口角の引き上げが日本歌曲より多い。又ユリやポルタメントの前に軟口蓋が弛緩し鼻腔共鳴を多く用いる傾向が見られる。これらの結果から，日本歌曲とは異った共鳴作用で歌声としての響きを得ていることが推測できる。

(4) 日本歌曲とイタリー歌曲では，洋楽的要素として，ヴィブラートを伴った歌声，低次倍音の充実等で共通点が見られるが，共鳴腔の形が異なり（特に /u/ ），音韻性では相異点が多い。つまり，同じ洋楽的発声で歌っても，言語の違いにより調音点，共鳴腔の形が変化し，音色が異なってくる。

以上の様な結果が得られた。

これまで日本語は歌声として響きにくいとされ，日本の歌曲の場合も洋楽発声つまり西洋の言語の音韻を基本とした音色に日本語をあてはめていく方法が多くとられてきた。それに対しての批判と，日本語のより自然な歌唱法を求める意見はこれまでも多く聞かれる。今回私が歌った民謡的歌曲の歌声は，上記の結果から，いわゆる日本語の発声としての条件を持っていること，日本の歌曲の発声法の確立を考える上で一つの可能性を持ったものであること等の結論を得ることが出来た。

第二のテーマは，表現法の研究として音の移行法に焦点をあて比較研究を行った。研究方法は，同一の曲を洋楽，伝統音楽の各被験者に歌ってもらい，それに私自身の二通りの歌唱（洋楽的歌唱と伝統音楽の歌唱法を加味したもの）を加えて，サウンドスペクトルグラフで分析した。結果は以下に述べる。

(1) 伝統音楽の歌唱法は，各被験者間に細かい表現上の差異はあるが，多くの共通点を持つ。それらの共通点は洋楽的歌唱法と異なる点である。

(2) その特徴として，音の移行と発音のずれがしばしば見られる。又フレーズの最初の二音節がまとまる傾向が見られる。又子音を非常に巧みに扱い，同時に細かいディナーミクを伴って音の移行が非常になめらかである。

(3) 長音を二音節に発音する傾向がある。

(4) 一方，洋楽的歌唱では，ヴィブラートを伴う一定の響きを持った母音が連続し，その合間に子音を非常に短かく発音している。

(5) 音の移行と一音節の発音がほぼ同時で，音の移行も明瞭である。ディナーミクも少ない。

(6) 長音を，あたかも一音節の様に引いて発音している。

(7) 私の二通りの歌唱を観察すると，一方は洋楽，もう一方は伝統音楽のそれぞれの共通点を持っている。しかし，ディナーミクにおいてそれぞれの歌唱法と異なる点が多い。この点で今後さらに工夫が必要と思われる。

以上の様な結果が得られた。

この研究で，従来より体験的，あるいは理論的に言われてきた両者の表現法を科学的に実証することが出来た。伝統音楽に見られる非常に巧みで細やかな移行法は，日本語から生まれ，日本語をより効果的に表現していくために発達した技法である。今後，日本の歌曲に於いて，日本語のより豊かな表現法を考えていく場合，そうした技法を参考とし，洋楽の借りものではない，あくまでも日本語から生まれた独自の移行法を確立する必要があると考える。この研究によって，そうした問題がある程度具体的になったことも一つの成果である。